教育委員会定例会資料 5

令和４年１１月１７日
文化スポーツ部美術館

府中市美術館 運営協議会 答申書

― 府中市美術館の望ましい姿について ―

令和４年１１月

府中市美術館運営協議会

【はじめに】

府中市美術館運営協議会は、美術館・博物館の運営や事業に携わってきた者、美術史の研究者、美術作家、府中市の学校教育・家庭教育・地域活動の代表、そして利用者の声を反映する公募委員という、計１２名の委員によって構成される。各委員にはそれぞれの経験や知見を活かしつつ、美術館に対する全国的な視座と、府中市の地域特性に寄り添った視点の双方から、府中市美術館の運営について助言・提言することが期待されている。本協議会は、令和２（２０２０）年１２月から令和４（２０２２）年１１月までの２年間にわたって、諮問事項「府中市美術館の望ましい姿」について、計４回の協議を重ねてきた。その協議を踏まえ【運営全般】【作品収集活動】【展覧会活動】【教育普及活動】【広報・情報発信活動】【施設整備】について、意見を提出する。

【運営全般】

府中市美術館の望ましい姿を考えるにあたっては、その成り立ちやこれまでの実績などを踏まえる必要がある。

同館は、平成１２（２０００）年１０月に開館したが、それに先立つ平成８（１９９６）年６月には、府中市議会文教経済委員会において「府中市美術館建設基本計画」が了承された。その中では、基本テーマ「生活と美術＝美と結びついた暮らしを見直す美術館」や、四つの基本的性格「①地域社会に根差した親しみある美術館」「②質の高い美術作品を身近に鑑賞できる美術館」「③市民や子どもの才能と美意識を育む美術館」「④新しい美術情報を吸収できる美術館」が、掲げられている。

府中市美術館は、これらの基本計画に基づいて府中市が設置し、公立直営館として運営されてきた。今後のあり方を考えていく際にも、この基本計画や運営形態は維持・継承されていくべきである。

その一方で、この２０年余りの間には、デジタル技術の進展や価値観の多様化など、社会状況も大きく変化してきた。博物館・美術館を巡る国際的な動向にも対応していく必要がある。そして本協議会が開催された期間には、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行およびそれに伴う行動制限という、未曾有の状況が生じた。こうした変化や危機にも柔軟に対応しながら、活動を継続していってもらいたい。美術館は人々に希望を与える、そしてさまざまな利用方法・活用方法が考えられる場である。

設立準備の時点で掲げた目標を維持することと、時代の変化に合わせて柔軟に対応することとの、双方のバランスを取りながら、運営・事業・設備を考えていく必要がある。

【作品収集活動】

美術館ではこれまで､購入･寄贈あわせて約２，３００点の美術作品を収集してきた。これらの収蔵作品は、美術館活動の基盤であるとともに、今後も末永く残されるべき府中市民の貴重な財産である。収集方針に基づきながら、１００年後にも輝きを失わないコレクションの形成を目指さなければならない。

「江戸時代の絵画」や「明治から昭和にかけての洋画」といった作品群は、展覧会活動と密接に関連したものであり、同館の特色の一つである。また、府中市とその近隣の市では多くの作家が活動しており、美術大学も複数ある。このような地域の特性を活かすため、「府中および多摩にゆかりのある作品」や「現代の美術」についても、調査し、収集に結びつけていくことが望まれる。

充実した収集活動を継続していくためには、新規作品の購入は欠かせない。現在、作品購入は府中市美術品購入基金を財源としているが、この基金の維持や拡充は不可欠である。

収蔵作品は、適切な管理・保管を行い、後世に残していかなければならない。そのためには、作品とその情報の管理のための電子システム（データベース）の構築、作品の保存環境の維持、収蔵庫の収容能力の増強計画などが必要となってくる。

また収蔵作品は、保存のための十分な配慮を行った上で、積極的に活用していくべきである。常設展や所蔵品展での展示はもとより、印刷媒体や電子媒体での作品情報の紹介、美術館以外の場所での作品展示なども、検討事項に加えるべきである。

【展覧会活動】

開館以来、数々のユニークな展覧会を企画・開催し、府中市内はもちろん全国的にも高い関心を集め、多彩な鑑賞の場を提供してきた。これは、館長をはじめ、担当学芸員や職員が一体となって、さまざまな工夫をしてきた結果といえる。また、コロナ禍にあってもその影響を最小限にとどめ、展覧会活動を継続したことは、高く評価できる。

その上で、企画展のさらなる充実のために考えられることを、以下に列挙する。

①企画内容を高めるために､外部の研究者や美術評論家と連携･協働していくこと。

②新たな観覧者を開拓するために、公募展・コンクール展などこれまでとは趣の異なる企画を行ったり、ターゲットとなる利用者層をより明確に意識したりすること。

③展示作品への理解を深め観覧者の満足度を高めるために、解説文の質や読みやすさの配慮、ＩＣＴ（情報通信技術）の活用等により作品解説を充実していくこと。

これらを参考としながら、工夫を重ねていってもらいたい。

また、収蔵作品を常時展示する常設展やテーマを設けて特集展示する所蔵品展は、美術館の存在意義を伝える上で重要な展示活動である。この部分についても、企画展同様に力を注いでいく必要がある。

今後も美術館の展覧会活動が充実し、多くの鑑賞機会を提供していくことを、期待している。

【教育普及活動】

美術館では、作家の制作の過程を公開する「公開制作」、作品作りの楽しさを体験的に伝えるワークショップ「アートスタジオ」、府中市立の小中学校の鑑賞授業の機会となる「美術鑑賞教室」など、多彩な教育普及活動を展開してきた。

とくに学校教育の現場では、子どもたちへの美術鑑賞の場の提供やそのための美術館との連携が定着してきている。府中市内に美術館があることは、子どもたちの情操教育などの面において大きな利点であり、美術鑑賞教室をはじめとする児童・生徒への取り組みは、今後も継続してもらいたい。

幼少期から美術を楽しむことが習慣化していけば、１０年後、２０年後にその成果は大きく花開くことになり、子どもたちへの取り組みは今後も重要な事業である。さらに学校の利用については、府中市内ばかりでなく近隣地域においても需要があることと思う。

ＩＣＴが目覚ましく発展した現代においては、いつでも誰もが手軽に様々な情報を取得できるようになり、学校現場においてもタブレットパソコンの導入が進んでいる。こうした状況に対応して、展覧会の様子、作品の解説、教育普及活動をオンライン上で公開するなど、教材として学校に提供することが望まれる。その一方で、美術館の最大の強みは、実物の「作品を鑑賞する」「創作活動に参加する」という場を伴う実体験にある。オンライン体験と実体験の双方のメリットを生かした事業展開を行っていく必要がある。

教育普及活動のより一層の充実のためには、ほかの機関やさまざまなスキルを持つ人々との連携や、これまでにない視点から事業を実施することも有効である。このほか、鑑賞ボランティアの養成による鑑賞プログラムの拡充、大学や在住外国人との連携による作品解説の多言語化、小中高校生たちの祝休日や放課後の創造活動の支援、乳幼児やその保護者が気兼ねなく利用できる機会の拡充、誰もが利用しやすいプログラムの設定、リピーターを増やすための工夫などが求められる。

【広報・情報発信活動】

広報・情報発信の手段としては、従来から主力となってきたポスター・チラシ・広報誌などの印刷媒体、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどのマスメディア、ホームページやＳＮＳ、動画配信などの電子媒体など、多彩な形態がある。

なかでも電子媒体は、近年その技術的進化と利用促進は著しく、今後も注力していくべき分野である。動画コンテンツは家庭での視聴ばかりでなく、学校の授業での活用など、さまざまな利用方法が考えられる。ＳＮＳによる情報発信は、利用者によって情報拡散という付帯効果が期待できるほか、ターゲットの絞り込みもしやすく、広報面での費用対効果が高い。さらに電子媒体は、実施中の事業についての情報の発信ばかりでなく、過去の事業についての情報の蓄積・アーカイブ化という役割を果たすことも可能なため、重要な活動である。

発信情報の内容については、単純な事業単独の広報を目的としたものばかりでなく、設立理念や運営方針に関するもの、美術作品や図書など資料情報の提供、作品解説や教育普及の動画配信なども必要だろう。その結果、美術館のブランドイメージを高めることも期待できる。

府中市美術館の情報発信活動は、総じて充実してきているが、これらの活動を管理係や学芸係の職員が兼務していくことは、その専門性や業務量の面から困難である。

広報・情報発信活動を戦略的に行うとともに、即時性をもって対応していくためには、専門的な知識と経験を持った担当者の配置が必要である。

その一方で、電子媒体が発達する状況下においても、デジタル技術になじみのない層や印刷物に親しみを持つ層も存在し続ける。また、印刷媒体と電子媒体には、それぞれの長所と短所がある。従来からある媒体と新しい媒体の特徴を活かした多角的な広報・情報発信を行っていくことが望ましい。

【施設整備】

今後も健全な美術館運営を継続していくためには、建物・設備の修繕・更新は早めに行うことが望ましい。そのことが結果的に、美術館の長寿命化と維持コストの低減に有効に働く。また今後、施設の維持・長寿命化のための大規模な改修が行われることと思うが、その際には、建物の建築当初のデザインやイメージを踏襲すること、浸水や地震など自然災害への備えも十分に配慮すること、改修のための長期休館中も美術館の活動を維持していくこと、改修後の長期的な維持管理計画を策定していくことなどが必要になると考えられる。

収蔵庫については、立地条件からも大規模な増床は困難と思われるが、棚の増設など収容能力を増強することで、良好な収蔵環境を維持するべきだ。

また、展示室照明の更新・ＬＥＤ化や額装方法の工夫による鑑賞環境の改善、降り用エスカレーターと授乳室の新設などさまざまな利用者に対応した施設の拡充、Ｗｉ−Ｆｉ環境や電子決済システム、多目的な教育普及スペースといった新しいニーズへの対応なども、検討していただきたい。

【おわりに】

府中市美術館はこれまで、作品収集活動、展覧会活動、教育普及活動の各分野にわたって注目を集める個性的な事業を展開してその評価は全国的にも高く、また、府中市の文化拠点のひとつとして市民に親しまれる活動を行ってきた。これらの成果は、単に美術館とその職員の努力にとどまらず、公立直営館としての安定した運営体制や、府中市の他部署との円滑な協力関係があってのものである。

しかし、開館以来２０年余りを迎えた美術館では、新たな時代に対応した事業展開や機能の充実が求められ、また老朽化した施設の改修・更新の必要性が生じており、これらへの適切な対応や予算の確保が、今後は課題となっていく。

設立当初の基本計画を踏まえるとともに、時代の変化に柔軟な対応を伴った改善・改革を図り、府中市美術館の活動がより一層充実していくこと、そして人々に「希望を与える場」となっていくことを期待する。

令和４年１１月

府中市美術館運営協議会

会　長	谷　矢　哲　夫
副会長	橋　本　善　八
委　員	持　田　　晃
委　員	寺　田　慎　吾
委　員	佐　伯　　智
委　員	隠　岐　由紀子
委　員	髙　尾　戸　美
委　員	金　田　実　生
委　員	吉　田　裕　子
委　員	堀　江　一　男
委　員	清　水　正　人
委　員	瑞慶覧　香　織